

経済で  
読み解く  
日本史

室町・戦国時代  
1336—1573 1493—1590

序に代えて　　「お金の流れがわかれば「歴史」がわかる

世の中はモノとお金のバランスによって成り立っています。お金が不足すれば人々はお金の価値が将来的に上がると見込んで消費を先送りし、貯め込んで使わなくなり、将来的な不安から人々は過激な思想に染まり、時には暴力に訴えて世の中を変えようとしています。当初、彼らは少数派ですが、不況が長引いてくると徐々に数が増えます。室町から戦国にかけての時代は、そんな彼らが多数派の時代でした。

「貨幣量」の増減は政治的にも経済的にも大きな影響を与えるため、権力者はそれをコントロールして国内の安定化に努めるべきです。ところが、日本ではそもそも江戸時代までは自国の貨幣を発行していませんでした。その代わり、支那との交易を通じて銅銭を輸入し、それをそのまま国内で流通させていたのです。

銅銭の流入量は日本の対外政策のみならず、国際情勢、特に支那の王朝の金融政策に大きな影響を受けました。世界情勢に振り回される日本経済――。こんな状態では

2

経済の安定はおろか、国内の平和すら実現することが難しかったのです。

### 必ず押さえておきたい普遍的法則「経済の掟」

どんなに強い政治権力を持つ者でも絶対に逆らえない掟おきてがあります。それが「経済の掟」です。それは、例えば「お金をたくさん刷れば必ずインフレが起こる」とか、「お金の量が減ればデフレになる」とか、「デフレになるときは自国通貨高になる」といった、とても単純なルールです。

#### 【経済の掟】(例)

- お金をたくさん刷れば必ずインフレが起こる
- お金の量が減ればデフレになる
- デフレになるときは自国通貨高になる

経済で歴史を読み解くという作業は、歴史上の出来事を「経済の掟」という観点から観察する作業です。それはある一面では、「時の権力者がいかにして経済の掟と格闘したか」を観察し、「その政策が日々生きるために商売をしている名もなき民にと

のような影響を与えたのか」を確認する作業とも言えます。

今回のテーマである室町時代に生きていた人々は、「ワルラスの法則」も「マンデルフレミング効果」も知りませんでした。しかし、目端の利いた天才は何となく経済の掟を肌で感じ、世の中の枠組みを変えようとした。経済の掟に逆らうのではなく、むしろそれを利用して富を拡大させていくことを図ったのです。

その目端の利いた天才のひとりに織田信長がいました。間違いなく信長は経済の掟を「ある程度」は理解し、それに沿った政策を実施しています。ただし、それが日本全国に広くあまねく行き渡ったかどうかは別として……。

「経済は身体であり、政治（制度）は衣服である」という言葉を私は大学の国際政治史の授業で聞いたことがあります。肉体が成長すると、古い服を脱ぎ捨てて新しい服に着替えるように、経済が発展してくると政治システムは変容を迫られるということです。

本シリーズの一つのテーマがこの「衣替え」です。そして、それは常に権力闘争を伴いました。例えば、幕府の内部の権力構造の変化や、幕府そのものの解体などがそれに当たります。その中でも織田信長と豊臣秀吉はその後の日本経済の枠組みに大きな影響を与えました。

## 「戦国時代」に突入した原因はデフレだった

一方で、国の肉体（経済）は「名もなき民による一攫千金へのチャレンジ」の結果として成長するものです。江戸時代の百姓（農民とは限らない）は市場の動向を常に気にしていて、チャンスがあればリスクを恐れず、勝負していました。

江戸時代には一介の船頭から巨大商社を立ち上げた人もいれば、火事に乗じて材木市場でぼろ儲けしてそのまま公共事業を請け負う巨大コングロマリットを立ち上げた人もいました。

実は、その商魂たくましい日本人というのは江戸時代に突然出てきたわけではなく、それ以前からたくさんいたのです。しかも、その多くが実は宗教家だったりもします。信長がなぜ寺社勢力と対決せざるを得なかったのか、その理由も経済から見れば納得できるでしょう。

景気をよくするためには、借金をしてまで商売をするようになりスク選好的な人をサポートしなければなりません。なぜなら、商売は何が正解かわかりませんから人々がたくさんチャレンジして、生き残ったものを暫定的な正解とするしかないからです。

淘汰によって生き残ったアイデアこそがイノベーションであり、それが劇的な生産性向上をもたらしめます。こうすることでしか一国の経済は発展しません。しかし、それを進めていくためには貨幣価値の安定が不可欠です。

経済がデフレに陥ると、景気の悪化によって債務の実質的負担が重くなります。デフレを脱却せずに徳政令を連発しても、焼け石に水です。デフレを脱却するためには、貨幣量を継続的に増やしてインフレを起こさなければいけません。インフレによって、借金の実質的価値は目減りします。借金をしてまでリスクを取る経済のチャレンジャーにとつては、インフレが大きなサポートになるのです。

ところが、室町時代はそれとは正反対の時代でした。

この時代（室町時代……筆者注）は日本で銭貨が鑄造されず、中国からの貿易の見返りによって中国銭（明銭）を輸入するのが唯一の貨幣発行の方法であった。ところが四代義持將軍時代に中国との国交が断絶されたため、義教のころは銭貨が極端に不足していた。室町時代が一貫してデフレ経済であったのは、このような事情による。

（出典：『戦国期の室町幕府』今谷明／講談社学術文庫）

室町時代に戦乱が続いた理由として、「小氷期の天候不順で飢饉が頻発した」とか、「権力構造が有力な武士（守護）の連合政権で不安定だった」とか、いろいろなことが言われます。しかし、私から見れば政治権力の不安定化の根本原因はまさにデフレであって、これを解決しない限り政権の安定はなかったと思います。

室町時代から戦国時代にかけて戦乱が多かったのは、全体的な経済の基調がデフレだったからです。デフレは景気の悪化、長期の停滞を招き、人々を困窮させます。困窮した人々は平和なときには見向きもされない過激思想を支持します。第二次大戦前のドイツで共産党とナチスが勢力を拡大したのはそのためです。こういう人々はやくそくになって戦争による問題の根本解決を目指したりもします。

室町時代の政治的リーダーは選挙によって選ばれてはいませんが、戦争に領民を動員するには領民たちの戦争に対する「やる気」が必要でした。戦争に勝てば略奪によるご褒美をもらえるというのが当時の常識です。領民が大名の動員に応じるということは、少なくともその時点における領民たちの通常業務よりも、戦争に大きなリター

ンを期待した人がたくさんいたということです。もちろん、それ以外の理由で戦争に参加した人もいたことは否定しませんが、経済的な理由を無視することはできないでしょう。

室町時代は全体的にデフレ圧力が強く、経済的に困窮していたからこそ、戦争で一発逆転を狙う人が後を絶たなかったと言えます。

逆に、徳川時代になると、室町・戦国的な意味での戦争はなくなりました。その理由は、本シリーズ第3巻『経済で読み解く日本史〈江戸時代〉』をお読みください。

\*

天下統一まであと一歩だった信長の「経済政策」の歴史的意義は何だったのか？ それを知るには、まず「信長以前」を知る必要があります。なんと、室町経済の主人公は寺社勢力。彼らは単なる宗教団体ではありません。その衝撃の正体とは？

ぜひ本書を最後までお読みいただき、皆さん自身もお考えいただければ筆者として幸甚の極みです。

経済で読み解く日本史〈室町・戦国時代〉 もくじ

序に代えて 〽お金の流れがわかれば「歴史」がわかる 2

必ず押さえておきたい普通の法則「経済の掟」 3

「戦国時代」に突入した原因はデフレだった 5

## 第一部 中世の「金融政策」と「景気」

### 第一章 明の景気が日本経済を左右した時代

経済の先行きを決める「モノとお金のバランス」 19

お金の製造と「景気」の関係 22

室町時代は大変な高金利だった！ 26

自国通貨が存在しない？ マネーから見た「日明貿易」の意義 28

支那の銅銭を「両替」していた賢い日本 29

なぜ危険を顧みず支那と交易したのか？ 32

日明貿易は「国際貿易秩序」への参加だった 35